

事業活動報告 NO.2

分野横断フォーラム型授業の実験（医療系、法政策系）

学部・大学を越えてネット上で学生間及び学外有識者の知見に触れ、チームで多面的に学びを協働し、問題発見・課題解決力を訓練する授業モデルの可能性を研究するため、本協会学系別FD/ICT活用研究委員会内の「医療系フォーラム型実験小委員会」、「法政策等フォーラム型実験小委員会」にて研究を行った2021年度の活動を以下に報告する。

2-1 医療系分野

実験授業は、問題解決力養成を目的に、医療・福祉・栄養・情報コミュニケーション6分野の学生2グループでZoomによるテレビ会議、LINEでの意見交換を通じて、「コロナ禍時代の持続可能な医療・健康生活を考える」をテーマに、9月から11月に5回、17時以降に行い、多分野の視点を取り入れながら問題解決に取り組む授業デザイン、授業環境、授業運営等の研究を以下の通り進めた。

1. 授業の実施内容

(1) 授業の構成

1回のネット授業は90分とした。グループにファシリテータ2名の教員を配置し、参加学生はネット上のディスカッションに関するマナーを事前に学び、ネット授業期間中は学生用ネット会議室を自由に利用できるようにした。

(2) 授業の概要

授業の進行とプロダクト、提出物

9/18 (木)	1回目	オリエンテーション	テーマ認識
●目標書き出しシートの記入。アイスブレイキング			
9/30 (木)	2回目	問題発見、整理	
●コロナ禍の実体験を中心に、国内外で興味がある主なコロナ禍の社会現象を調べ、共有する。			
10/7 (木)	3回目	問題点の優先順位の決定	課題設定
●コロナ禍と共存していく上での本質的な問題は何か議論する。 ●課題を決定する。			
10/21 (木)	4回目	解決策の検討	
●課題に対する対応策、解決策を検討する（グループプロダクト作成）			
11/4 (木)	5回目	解決策の説明	
●2グループが合流して解決策の構想を発表し、討議を行う。 ●教員からの意見を反映して、グループプロダクトを完成する。 ●各自、学修レポート「コロナ禍時代の持続可能な医療・健康生活について」を提出する。 ●ポートフォリオを記入する。			

<第1回> テーマの認識

国内外での主なコロナ禍の社会現象と対策を調べ、どのような関係性が見られるか個別に整理した結果を共有した上で、チームとして意見交流し、問題の範囲を大まかに整理する。（考察の結果は、PBLプラットフォームで共有する）

<第2回> 問題発見、問題整理

感染症対策として有効であったと思われる点、有効性が不明確な点、対策がとられていない点などを個別に書き出し共有した上で、コロナ禍と共存していく上での本質的な問題は何かを議論する。その上で、感染症対策等の有識者からの意見を踏まえて、問題発見を行う。（PBLプラットフォームで共有する）

<第3回> 課題の抽出・設定

コロナ禍で命を守る医療、生活を守る医療や健康を増進・強化する生活を実現していくために、それぞれの分野で対応していくべき課題の抽出を個別に書き出し共有した上で、チーム内で課題の洗い出しを行い、複数の課題を設定する。

＜第4回＞ 解決策の考察、構想とりまとめ

持続可能な生活を守る医療の在り方、健康生活を主体的に捉え維持・進展するための方策を個別に提案させ、実現性の観点からチーム内で議論し、優先順位をつけて構想をとりまとめる。また、構想が進んだ段階で、有識者、学生との意見交流を行い、助言を受ける。

＜第5回＞ 構想レビュー、講評、振り返り

2チームが合流して解決策の構想を発表し、チーム全員でレビューを行うとともに、構想の内容について有識者から意見を求める。その結果を踏まえて学生一人ひとりから学修成果のポートフォリオを提出させる。

(3) 分野連携PBLのプラットフォーム

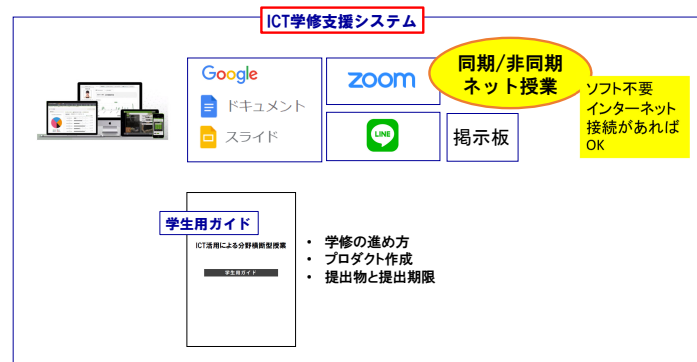
① ICT学修支援システム

Googleドキュメント・スライド、Zoom、LINE、掲示板等で実施した。

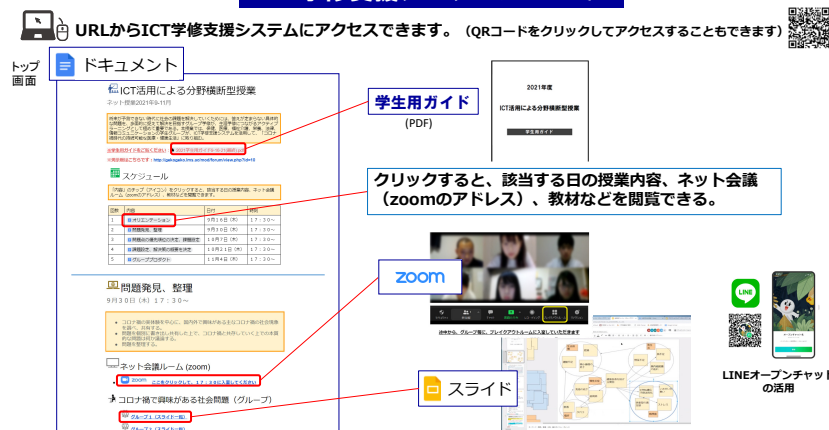
② 学生用ガイド

学修の進め方・プロダクト作成・提出物と提出期限などを詳細に記述し、URLやQRコードからICT学修支援システムにアクセス可能にし、クリックすると、該当する日の授業内容、ネット会議、教材などを閲覧できるようにした。

Webベース分野連携PBLのプラットフォーム



ICT学修支援システムについて

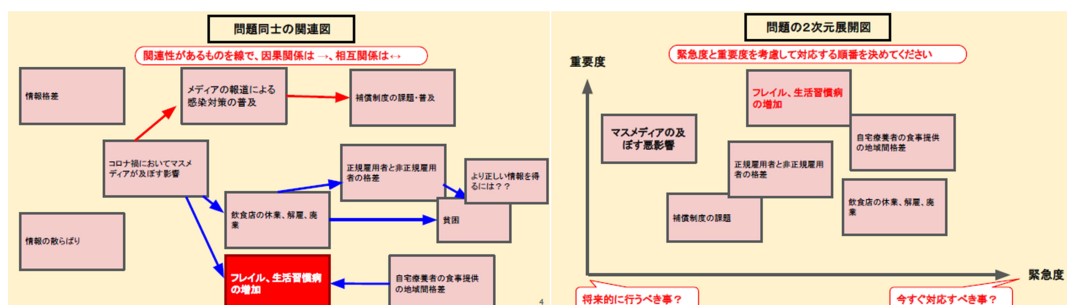


(4) 学生プロダクトの一部と成果

- ① 問題発見、問題整理の「実体験を通じて興味がある社会問題（個人）」では、「コロナ禍における障害者雇用」、「新型インフルエンザ等対策特措置法と緊急事態宣言」、「SNSでのデマ横行」、「感染者数や、ワクチンに対する報道の仕方」、「同調圧力」、「生活リズムの乱とメンタルヘルスへ及ぼす影響」などが話し合われ、グループでの「コロナ禍で医療・健康生活を続ける上で重要な問題」では、メディア、心理、情報リテラシー、食、雇用などから幅広い問題を抽出した。
- ② 3回目の問題点の優先順位の決定、課題設定では、問題同士の関連図を作成⇒問の二次元展開図を作成し、緊急度と重要度を考慮して対応する順番を決めた。
- ③ 4回目の解決策の検討では、共通の課題「フレイルの予防に取り組む」について、予防策を考え・実行することに、医学・歯学・栄養学・社会福祉学それぞれの視点を活かすこと、情報コミュニケーション学の学生が専門家に意見をうかがうとともに、それぞれの意見を総括し発信などを行った。

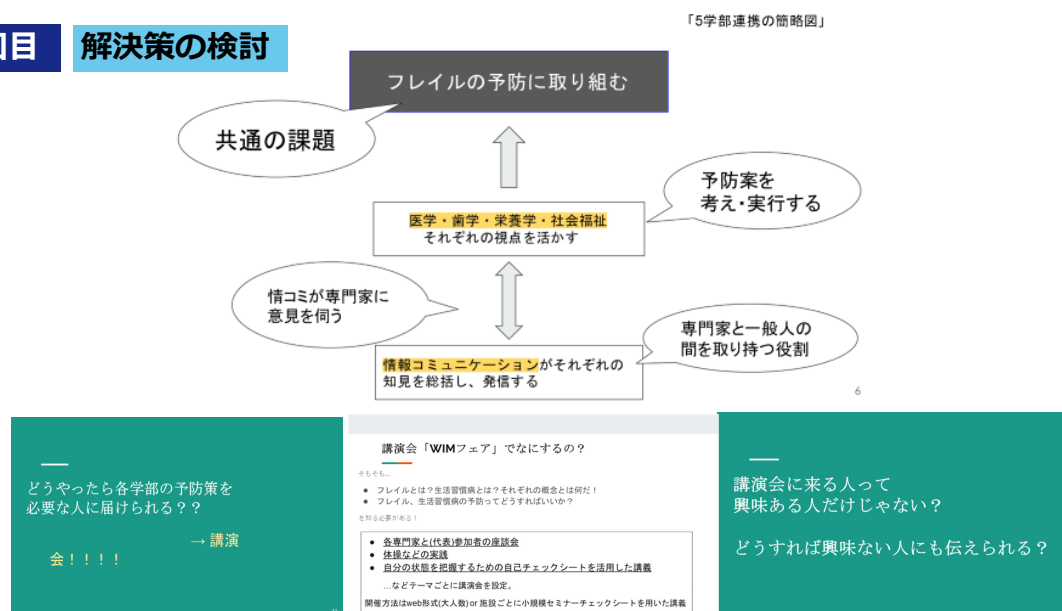
学生プロダクトの一部

3回目 問題点の優先順位の決定 課題設定



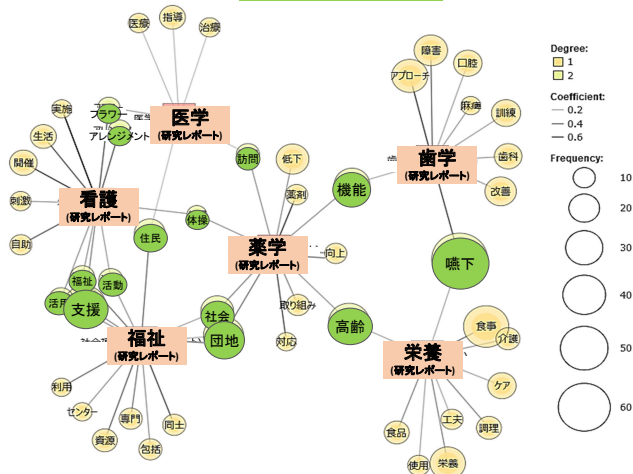
学生プロダクトの一部

4回目 解決策の検討



研究レポート（個人）の解析結果

分野間の連携 と 各分野の独自性



授業後に、個人で仕上げたレポートでは、特に、各学部で対応すべき問題に対して、**関連する学部と連携した対応策を提案**できていた。

2. 実験授業の成果

【学生アンケートの結果】

(※アンケートで「とてもそう思う」と回答した割合)

- ① 今回のPBLによって、学修意欲が高まった：7割
- ② 他のループメンバーとのディスカッションで、問題への興味がさらに深まった：8割
- ③ 他学部（科）学生とディスカッションをしたことは、自分にとってよい刺激だ：10割
- ④ 今回のPBLを通じて、コミュニケーションの重要性が理解できた：9割
- ⑤ 他学部（科）学生は、今の自分にはない専門的な知識を所有していた：10割
- ⑥ 他学部（科）学生と協力して、グループプロダクトを作成することができた：9割
- ⑦ 今回のPBLが終了して、充実した気持ちである：10割

【学生アンケートに寄せられた声：一部抜粋】

- ① この経験は新鮮で、自分の専門外のこともたくさん知れて知識の幅が広がった。
- ② コロナというテーマで、こんなに視点が違うとは思わなかったが、各分野の視点を生かして解決策を検討することはとても有意義だった。
- ③ 他分野の学生に、相手を考えてどう伝えるかに苦労したが、有意義であった。
- ④ 自分の立ち位置と相手を考え、医療から行動経済学なども学ぶよう考えを改めた。
- ⑤ 2グループが相互に刺激を与え、相互に確認して授業ができたことは有効だった。

3. 改善すべき点

- ① お互いの専門性を理解し、異分野でかかわりあって考えることを目指したが、専門性を相互に説明・理解するための工夫が不足していた。
- ② 情報コミュニケーションと医療系の学生が自発的に自分たちだけで集まって話し合う機会や場所の不足、学生が打ち解ける時間（アイスブレイキングなど）の工夫が不足していた。
- ③ 問題の抽出では、答えのわかりそうなものを選定する傾向があり、なぜこの問題を抽出したのかの論理的な説明が不足している。
- ④ 多方面から解決にアプローチする力と知識が不足している。

2-2 法政策系分野

実験授業は、SDGsや社会的な課題について、ネット上で複数大学のゼミナール、有識者を交えて法政策等の観点から多分野で解決策を議論し、提案・発表するフォーラム型授業の有効性を検証するため、2大学3チームで「コロナ時代とそれ以降の健康と福祉を考えるー特に格差社会とはどのように変わるべきか、変わったか」をテーマに、2021年10月26日から2022年1月8日にかけて8回行い、掲示板に7本のスレッドを立てて考察を展開した。その中でチーム間および有識者を交えた顕著な学修成果が見られた2本のスレッドを対象に報告する。

【実験授業の目的】

コロナ禍社会でのSDGsを考える観点から、複数大学のゼミナールと有識者を交え「健康と福祉」の提案について解決策を議論し、発表・講評を通じてフォーラム型授業の有効性・課題を研究する。

【テーマ】

「日本の健康と福祉」をテーマに持続可能な新しい人間社会の営みの在り方、共生を議論する。

【チームの構成】

- * 神奈川大学（中村チーム）・・・2年生各5名で5チームの25名
- * 神奈川大学（井上チーム）・・・2年生2名1チーム、3・4年生7名で2チームの9名
- * 京都産業大学（高嶋チーム）・・・3年生3名と4年生1名で1チームの4名
- * チームの紹介：参加学生のハンドル名を掲載

【実験授業で目指す能力】

- * 情報の収集と選別、根拠となるデータや情報を用いて問題発見ができる。
- * 多分野の意見を組み合わせ課題を設定し、解決策を提案できる。
(論理的思考力、批判的思考力、合理的判断力、発想力、創造力などの向上を目指す)
- * 議論・意見が筋道が通っており、分かりやすい表現ができる。

【実験授業の位置付け】

- * 授業の有効性を検証するため、チームに参加した学生一人ひとりから学修の成果について、ポートフォリオの作成を義務付ける。

【実験授業の形態・方法】

- * 電子掲示板を設けて、オンラインによる自己学修とチーム学修を行う。

- * 各チームの成果を掲示板に掲載・共有することで、学修領域の拡大を図る。問題の整理、課題の洗い出し、解決案の意見交換、有識者・学生との意見交流、他チームによる意見交流の振り返りを行い、最終案をとりまとめる。
- * 運営委員がコーディネータを務め、他の小委員会委員がファシリテータを行うことにした。

【実験授業の実施時期】

- * 中村チーム・・・10月26日～1月8日の8コマ
 - * 井上チーム・・・10月26日～1月8日の8コマ
 - * 高嵩チーム・・・10月26日から上記2チームの議論に参加
 - * 授業コマ数は、チームにより事前準備を含め8回程度とする。
 - ・1回 10月26日（オリエンテーション、フォーラム型授業の目的を説明）
 - ・2回 11月2日（SDGsの課題認識）
 - ・3回 11月9日（問題の発見・整理）、3チーム顔合わせ（昼休み30分）
 - ・4回 11月16日（課題の洗い出し）
 - ・5回 11月30日（課題の設定、有識者等との意見交流）
 - ・6回 12月7日（解決案の考察、有識者等との意見交流）
 - ・7回 12月14日（チーム間で解決案の中間発表・省察）
 - ・8回 1月8日（解決案の最終発表・評価：自己評価・有識者評価）
- 令和4年1月8日合同発表会を13時から15時に実施する。また、チーム間で振り返りができるように12月14日掲示板で中間レビューを掲載する。

【有識者等の意見交流】

廃棄物資源循環学会事務局の鍛冶美行氏、小豆島消費生活センター消費生活相談員の平林有里氏、沖縄大学経済法学部の神澤真佑講師、早稲田大学政治経済学術院の縣公一郎教授5名程度とした。また、委員校の学生で課題に興味・関心を抱く学生があれば、非同期で大学院生含めて意見・助言に参加できるようにする。

【授業の進め方】

- * 授業担当教員から実験授業の趣旨、ICT活用した授業の進め方、掲示板等の学修プラットフォームの使用方法、教員のファシリテータなど事前に理解を徹底する。また、参加学生一人ひとりに個人情報利用等の説明を行い、必要な許諾手続きを行っておく。
- * 掲示板を用いてチーム内で意見の共有、知識の関連付けを行う。
- * チーム内での議論が進んだ段階で、有識者、学生との意見交流を行い、助言を受ける。
- * 有識者、他チームが提示した意見を参考に振り返りを行い、最適と考える解決案を作成する。
- * 最終的にとりまとめた解決案をもとにプレゼンテーションを行い、有識者の意見・感想を受ける。
- * 学生一人ひとりから獲得できた成果を報告させるとともに、実験授業のプログラムや運営方法、学修支援体制、ネット環境等について意見を求める。
- * 学生個人の到達度評価は、本協会で作成したルーブリックを活用する。チームの評価は、ポートフォリオを提出させる。

【授業のプラットフォーム環境】

- * 学修プラットフォーム設置場所（掲示板URL、ネットの管理責任者）
- * プラットフォームの名称・構成内容
 - ・名称：「2021年法政策等フォーラム型学修プラットフォーム」
 - ・構成：掲示板、KJ法などのアプリを貼り付ける

（１） 掲示板による意見交流

電子掲示板に7本のスレッドを開設した。中村ゼミ5本、井上ゼミ3本、高嵩ゼミ1本に対する書き込み総数は69であった。

* 健康と福祉について解決すべき問題を検討する・・・	(10件)
* 健康と福祉について、とくにジェンダーの観点から・・・	(11件)
* 動物と人間の健康と格差社会について・・・	(26件)
* 沖縄と貧困問題(地域的貧困を断ち切る－日本で最も 貧困を抱える沖縄を救う)・・・	(13件)
* 日本の健康政策・・・	(4件)
* 日本の福祉政策・・・	(2件)
* 日本社会において残業をなくすには・・・	(3件)

- ① 沖縄と貧困問題の「地域的貧困を断ち切る－日本で最も貧困を抱える沖縄を救う」の検討では、沖縄在住の有識者（沖縄大学講師、神澤真佑佳氏）と学生との間で有益な意見交換が行われた。有識者からは沖縄県における生活コストの高さや本土との位置関係に係る輸送コストの問題など、学生が気づかないポイントについて、現地の視点から指摘がなされた。また、これに対して学生からもその指摘を踏まえた新たな提案がなされ、それについても有識者から新たな情報が提供されるなど、学生と学外の有識者との議論が成立した。この議論の成果は、学生による最終発表において十分に活かされ、最終発表における提案に深みを与えたと評価できる。

- ② 「動物と人間の健康と格差社会について」の検討では、SDGsの15番「野生動物の保護、回復」と関連させた議論が精力的に行われた結果、全テーマの中で最も書き込み数が多く、学生と学外有識者との意見交換が議論に厚みを与え、わが国の現状と法令の状況、裁判例、諸外国の法令と新しい動き等を把握した上で将来の制度設計につながる共通認識が得られた。

なお、「健康と福祉について、特にジェンダーの観点から」に現状の指摘と問題提起が行われたが、目立った議論の成果は得られなかった。

(2) 合同発表会

2022年1月8日13:00~16:30にZoomミーティングにより、神奈川大学の中村ゼミと井上ゼミ、京都産業大学の高畠ゼミ、有識者として外部から3名（廃棄物資源循環学会事務局の鍛冶未凝視、小豆島消費生活センター消費生活相談員の平林有里子氏、沖縄大学経法商学部の神澤真佑佳講師）と、委員会の早稲田大学政治経済学術の縣公一郎教授1名の参加を得て、3ゼミナールの合同発表を行った。

発表は、井上ゼミ3チーム、中村ゼミ5チーム、高畠ゼミは高畠教授によるゼミ活動報告が順次なされ、外部有識者からの質問や内部有識者による指導なども適宜行われた。

(3) 実験授業の成果と課題

【成果】

- ① 各チームが問題を発見して取り組んだテーマが極めて多様で、かつ討論や検討も優れて学問的であった。SDGsの観点からの批判的検討が十分に行われており、いくつかのチームにおいては自分たちの到達した結論に対する内省的な批判も見られ、深化した議論がなされた。
- ② 掲示板における学外有識者との議論が最終発表にうまく活かされていたことも特筆すべき点と言える。「地域的貧困を断ち切るー日本でもっとも貧困を抱える沖縄を救う」においては、当初学生の構想は数行の文章に過ぎなかったが、最終的には詳細な図表や説明から構成された提案となった。
- ③ 最終的なプレゼンテーション自体が十分に学術的な研究発表の域に達していたと評価できる。最も短いもので11分、最も長いもので24分となっており、概ね発表内容自体よく練られており、ほとんどのチームにおいて主張の骨子も明瞭であった。

【課題】

- ① 最終的なプレゼンテーションが相当に学術的となってきたことから、その論旨ないし発表自体の構成もさらに学術的によりよいものとしたい。発表に際してきちんとリサーチクエスチョンを立て、問題意識の起点とチームが到達した結論との間に明瞭な一本のストーリーを構築することを指導したい。
- ② 掲示板における学生と学外有識者との意見交換・議論をより活性化させる工夫が必要である。学生に対して掲示板への記事投稿・議論についてどの程度積極的に取り組んだのか聴取りをした結果、「どのタイミングで誰が記事の投稿をすべきか指示をして欲しかった」、「最初に投稿された記事が詳細なのでそれ以上何を追加すれば分からなかった」、「テーマによってはオンラインでの教員や学外有識者の的確な助言や情報の参照が少なかった」などの意見が判明した。

何かの指示を待つのではなく、自発的に議論を展開してもらう趣旨で掲示板を開設しているので、そのことを理解させる必要があった。

(4) 改善すべき点

- ① 教員による的確なアドバイスや情報の参照により議論が活性化することは、「動物の保護」、「沖縄の貧困問題」をテーマにしたスレッドの議論が他と比較して際立って優れていたことから裏付けられる。来年度は、教員及び学外協力者の専門分野も加味してテーマを選定するとともに、積極的に本授業にコミットしていただける協力者をどのように確保するかが重要な課題である。
- ② 掲示板での書き込みによる意見交流には限界があるので、これまでの方針から話し合いを優先するZoomに転換する。また、学外有識者が積極的に関わられるよう、テーマを限定（「ネット不正広告の影響を考える」など）して専門的な知見を紹介できるようにする。例えば、有識者から最初にプレゼンテーションを5分程度行い、問題を投げかけるなど、参加学生全員と顔合わせを行うなどの工夫が考えられる。
- ③ テーマに沿って有識者がどのように参加するのか、ある程度議論のシナリオを考えて、議論の立て方を委員会で考えておくようにする。その上で、参加学生全員でZoomを用いて理解の共有を徹底することが必要となる。参加学生にとって、自分の考えを筋道立てて言えるような訓練につながるという実験授業の目的意識を持たせられるよう、啓発ビデオによる工夫を考えることにした。

電子掲示板での意見交流の一部抜粋

Re: 沖縄と貧困問題

2021年12月14日(火曜日) 19:36 - ぼてと _ の投稿

確かに、立地上、生活コストが上がってしまうことは避けられないように感じます。
しかし逆に考えれば、その立地を生かして国外に目を向けて、国際的な貿易拠点・東アジアの貿易拠点としての沖縄を目指すことも今後可能であると考えました。様々な課題があるため長期的な計画とはなりますが、もしこのようなことが実現すれば沖縄の産業・工業は新たな方向に発展するのではないのでしょうか。「立地環境」という新たな視点を教えてくださりありがとうございました。

Re: 沖縄と貧困問題

2021年12月24日(金曜日) 19:44 - 神澤 真佑佳 の投稿

ぼてとさんが仰った、沖縄を東アジアの貿易拠点にするという計画は、第5次沖縄振興計画で、すでになされております(https://www.nikkei.com/article/DGXNZO41399910U2A510C1LX0000/)、沖縄を国際物流ハブにしようと、施設建設などがなされております(日経新聞の有料記事は、大学のDBなどで検索してください)。
もっとも、そうした物流ハブを作ったとしても、そうしたところに拠点を有する企業というのは、県外資本が多く、利益が本土に移転することになっているのが実情です(https://www.mof.go.jp/public_relations/finance/201905/201905f.html)。
沖縄の貧困問題を解決するにあたり、「稼げる産業構造を作るための方法論」を考えないと、自律的な経済発展は難しいですね。

解決策④ 沖縄をアジアの物流中継地点へ

海上運送の中継地点である

「ハブ港」

を目指す

ひとつのコンテナで 経済が大きく動く海運で **沖縄と日本** を元気にそして **世界をつなげる**

沖縄を「ハブ港」にする上での懸念点



1 歴史的課題(主にアメリカと中国)

- 目標 10【不平等】 国内及び各国間の不平等を是正する
- 目標 16【平和】 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを確保し、あらゆるレベルにおいて包摂的で透明性の高い包摂的な制度を構築する
- 目標 17【実施手段】 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを濃密化する

2 綺麗な海など、沖縄の豊かな自然を保護するか 環境破壊と人類の発展 産業化、従業員の移住 県民との支え合い

- 目標 9【インフラ、産業化、イノベーション】 持続可能な開発のためのインフラを構築し、包摂的で安全かつ強靱(レジリエント)な産業及びイノベーションの発展を図る
- 目標 11【持続可能な都市】 包摂的で安全かつ強靱(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する
- 目標 14【海洋資源】 持続可能な開発のために、海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する

動物と人間の健康と格差社会について

2021年11月20日(土曜日) 09:45 - ココナッツミルク _ の投稿

ここでは人だけでなく、動物にも目を向けて、SDGsの15番にある「野生動物の保護、回復」について考えたいと思います。
コロナのような感染症の原因となることもある動物ですが、コロナ禍でペットとして動物を求める人も多くいました。非常に私達の健康に関わっていると感じます。しかし、残酷な扱いを受けている動物は多く、人間との格差があると言えるのではないのでしょうか。
そこで、人間と動物が共存していくためにも動物の保護について議論したいと思います。
少し議論する内容が広すぎると感じたので、私が特に議論してみたい点を書き出しました。
1.動物と人間との関わり合いの中で存在する問題や解決策、またこれまでにあった問題やそれに対して行われた取り組み
2.1に関連しますが、野生動物の保護と感染症の関係、これからの対策
3.動物の密猟や違法取引をなくすために必要な取り組み
4.犬や猫の殺処分をなくすための取り組み
1~4について、意見を書いていただきたいです。
また、1~4以外にもSDGsの目標15に関連する意見や議論内容など、教えていただきたいです。
よろしくお願いします。

Re: 動物と人間の健康と格差社会について

2021年12月9日(木曜日) 16:07 - 神澤 真佑佳 の投稿

ココナッツミルクさんのご意見も、もっともだろうと思います。
ティアハイムのような施設を作ることができれば、いいのだらうと思う一方、単に箱物を作っても意味もないと思うものもあります。うちには、猫ちゃんがありますが、ご飯の世話だけでなく、トイレ掃除や毛づくろい、ご機嫌取りに、病気看病・通院、自分でご飯を食べなければ強制給餌まで、いろんなお世話があります。
人間なら意思疎通もできますし、健康保険がありますが、動物の場合だと意思疎通はできないため、精密検査をしてはじめて病気がわかりますし(その分、お金がかかる!)、健康保険も一応はありますが、月に使える上限が決まっているなど、人間とは異なるものです。自由診療なので、ほぼ原価しかとらない良心的な病院であればよいですが、そうでない病院は、費用も嵩みます。そして、そうした世話をするのは人間ですので、施設でやるには、さらに人件費もかかります。
このように、施設でやるには、手間とコストが掛かります。高島先生がご指摘のように、人間でない権利の客体に過ぎない動物にまで手厚い保護をすべきなのか、その根拠は何か。コストの原資を、仮に税金に頼るのであれば、税金を投入すべきメリットを示さないと、政策立案としては、難しいかなと思います。

Re: 動物と人間の健康と格差社会について

2021年12月21日(火曜日) 00:57 - ココナッツミルク _ の投稿

ACジャパンの宣伝について教えていただきありがとうございます。私もいくつか見たことがあることを思い出しました。
arutemisuさんがおっしゃるように、動物に関する問題や保護の必要性についてまず知ってもらうことも重要ですね。CMや街の広告以外にも何か方法がないか考えてみたいです。
また実施するのにかかる費用なども考慮しないといけませんね。

Re: 動物と人間の健康と格差社会について

2021年12月21日(火曜日) 01:17 - ココナッツミルク _ の投稿

そもそも日本の憲法が動物保護を妨げる理由の一つと言えそうですね。
高島先生が「アマミノクロウサギ訴訟」について紹介してくださっています。動物が権利主体になることについて考えさせられますし、「憲法に規定することも大事だが、問題について考え実行することが重要だ」という意見に納得しました。
動物と人間が共生するために最もよいバランスはどういう状況なのか、考えれば考えるほど難しいと感じます。